

京都市方言の原因・理由表現

船 木 礼 子

1. 京都市方言の原因・理由表現

現在の京都市方言では原因・理由の表現として、伝統的な関西の形式として知られるサカイニやサカイ、標準語と同じカラ、準体助詞とデから構成されているンデ、そして並列の表現形式から発展したと考えられるシが用いられている。

（1） 駅から遠い {サカイニ／サカイ／カラ／ンデ／シ}、迎えに行きますえ。

これらの形式については、出自や上方文献への出現時期、承接や用法の歴史的変化などについて、亀井（1936）、金田（1976）、小林千草（1977）、小林賢次（1992）、金沢（1998）などの研究の蓄積がある。しかし、現代の京都市方言で用いられているこれらの形式は、例えば理由を表す接続助詞としてのシについて「サカイより理由付けの度合いが小さい」（中井 2002:238）と指摘されているように各形式間に意味の違いはあるようだが、その文法的な差異を共時的に詳しく記述したものは少ない。そこで本稿は、共時的な観点から京都市方言で用いられる原因・理由表現について文法記述を行う。

なお、サカイやサカイニに注目すると、これと派生関係にあると考えられているハカイ、サケ、スケ、ハゲなどの形式がかなり広い地域にみられる（小林好日 1944、『方言文法全国地図』第1集 33 図、37 図など）。これらのサカイ系の形式の文法的特徴を各方言間で詳しく対照すると、その異同から、形式名詞出自の原因・理由表現の発展段階あるいは発展方向に関するモデルのようなものが見つかる可能性がある。こうした方言対照研究の基礎的データとしても、京都市方言の共時的な文法記述は貢献できるであろう。

2. 調査の概要

文法記述はインフォーマントの内省能力に負うところが大きい。そこで本稿は、京都市内生え抜きで内省能力が高いインフォーマントから得た情報をもとに記述を行う。インフォーマントは二人とも女性だが、当該方言の原因・理由表現形式の文法性判断については性差がないようなので問題はないと判断する。

インフォーマント A

女性、1961 年生まれ（調査時 45 歳）、美容師

京都市北区紫野出身（西陣）、現在、左京区内に住んでいるが移住後も継続して紫野の実家で仕事をしている

インフォーマントB

女性、1977 年生まれ（調査時 26 歳）、大学院生（調査時）

京都市中京区出身、在住（二条城付近）

調査の概要は以下の通りである。いずれも、筆者が調査している。

インフォーマントA：2006 年 11 月調査、面接調査

主に調査票の標準語例文の方言翻訳とその読み上げ

インフォーマントB：2003 年 6 月・10 月調査、面接調査および通信調査

主に調査票の標準語例文の方言翻訳

二人のインフォーマントには 16 歳の年齢差があるが、これは使用語彙に世代差があることを考慮したためである。表 1 にインフォーマントらが用いる接続助詞の使用状況をまとめているが、カラ、ンデ、シは二人とも普段使用すると回答している。だが、サカイやサカイニについてはインフォーマントAは使用語彙だが、インフォーマントBは文法性判断に自信がないと回答しており、Bにとっては理解語彙になりつつあるといえる。サケに至ってはBは聞いたことがないという。街中の老人でもサケは理解語彙となっているのに、中年層のAがサケを理解語彙としているのは、Aが現在住んでいる地域が左京区の北部であり、この地域の老年層が普段サケを使用しているという地域性による。

【表 1 原因・理由の接続助詞の使用状況】

	サケ	サカイニ	サカイ	カラ	ンデ	シ
インフォーマントA	△	○	○	○	○	○
インフォーマントB	×	△／○	△／○	○	○	○

○ 使用する △ 理解語彙 × 聞いたことがない

若い世代のインフォーマントBは、関西の伝統的な原因・理由表現の形式といわれるサカイ・サカイニが理解語彙になりつつあるため、Bの回答は予備的情報として参照するとどめ、以下の記述では主にインフォーマントAの回答をもとに、Aの使用語彙であるサカイニ、サカイ、カラ、ンデ、シについて、まずスタイル制限について述べた上で（3.）原因・理由表現の接続助詞の生起する環境などの形式的な特徴（4.）、意味・機能的な特徴（5.）、そして原因・理由の接続詞の特徴（6.）を詳述する。用例は特に断らない限りインフォーマントAのものを挙げ、文全体を京都市方言で表現し、注目する形式のみカタカナや下線で示す。用例につけている記号は、*が非文、?が不自然（文法的には許容）、#が文体的に不適切であることを示す。

用例末尾の数字は、「原因・理由表現調査項目一覧」の番号に対応する。このうち、IVから始まるものは、『方言文法調査ガイドブック2』「原因・理由表現」所収の「B項目 IV. 「し」の用法」に挙げられている調査項目番号である（IVの項目は、本書には掲載していない）。

3. スタイル制限

京都市方言のンデは、丁寧体とともにでなければ使いにくいというスタイルの制限がある。しかし、サカイニ、サカイ、カラにはこうしたスタイルについての制限はみられない。

(2) 赤ん坊が寝てる {サカイニ／サカイ／カラ／#ンデ／シ}、静かにしてくれへんか。(依頼、1-2-5.)

(3) 赤ん坊が寝てます {サカイニ／サカイ／カラ／ンデ／シ}、静かにしてくれませんか。(依頼、1-2-5.)

また、標準語の並列の接続助詞シはカジュアルなスタイルのものとして論文などの改まった文体では使いにくいというスタイル差があるが、京都市方言の原因・理由表現として使われているシは改まったスタイルでも用いられる。

(4) 危険やシ、エスカレーターでは遊ばんといてや。(IV-2-1-3.)

(5) 危険ですシ、エスカレーターでは遊ばんといてください。(IV-2-1-4.)

筆者の観察では、改まった場などで丁寧なスタイルで京都市はえぬきの人々が発話する時はシが多く使われているように思う。これは、シが複数の事象（根拠）があるなかのいくつかを列挙するという並列の表現からの意味派生を経たことにより、複数あるなかの一つだけを挙げて全ては述べないという婉曲性が聞き手に配慮した表現と認識されるという、対人的機能を持っているからではないだろうか。

このため、理由が一つしかない場合には、丁寧なスタイルでシを用いることはできない。

(6) *すぐに戻ってきますシ、少々お待ちください。(IV-2-1-2.)

(7) すぐに戻ってくるシ、ちょっと待っといて。(IV-2-1-1.)

丁寧なスタイルの発話では、行為要求の理由としてシの複数性がストラテジーとして機能している（つまり「並列のシ」）が、理由が一つしかない場合（つまり「原因・理由のシ」）は丁寧なスタイルの発話では使えないのである。

4. 形式的な特徴

4.1 音声上の共起制限

前接要素の語末の音声に制限がある場合がある。前接要素の語末が鼻音のとき、ンデは語頭の鼻音がこれと衝突し不適格となる。使用頻度の高い否定辞ン・ヘンがンデの前接要素となる場合、この制限によってンデは使えない。京都市方言では準体助詞として「行くノンは」のようにノンという形を用いるが、接続助詞としてノンデと言うことはなく、他の形式を用いるか、もしくは発話スタイルを標準語志向のものに切り換えて、「行かないノデ」のようにノデを用いるようである。

(8) *私、明日は行かへんンデ、よろしゅう言う^ゆといてください。(行かないので)

(9) *仕事やらなんンデ、あっち行っといってください。(しなければならないので)

(10) *雨が降ったらあかんンデ、傘持っていきなさい。(いけないので)

サカイニ、サカイ、カラ、シは前接要素が終止形であるため、前接要素の語末母音が無声化することはあるが、接続助詞が使用できなくなるような音声的な制限はない。

4.2 前接要素の活用形

サカイニ、サカイ、カラ、ンデ、シは全て述語要素につくが、このうちカラとシが終止形接続、ンデが連体形接続であることは、標準語のカラ、シ、ノデと同様である。サカイニやサカイは、形式名詞「さかひ（境）」に由来するといわれる形式であるが、終止形接続である。

(11) 明日は日曜日や {サカイニ／サカイ／カラ／シ}、銀行は休みですわ。

(11') 明日は日曜日な {ンデ}、銀行は休みですわ。

サカイニやサカイは出自である形式名詞「さかひ」の名詞性が前接要素の活用形の点では失われている。サカイニやサカイの節はあくまで文的独立性が高く主節に対置しうる事態を表している従属節である。

4.3 従属節内のモダリティ表現

原因・理由の従属節内では、認識的モダリティのうち伝聞や推定の表現には各形式間の共起制限がないが、いわゆる推量のヤロ（だろう相当）にはサカイニ、サカイ、ンデが付かず、カラとシだけが付く。なお以下の用例中、ンデには#が付いていることがあるが、これはンデが主に丁寧体で使われるという文体的特徴を持つことによる。

(12) (天気予報によれば) 今夜は雨が降るそうや {サカイニ／サカイ／カラ／# (降ルソウナ) ンデ／シ}、はよ帰ろ。(1-7-1-1.)

(13) ? (天気予報によれば) 今夜は雨が降るらしい {サカイニ／サカイ／カラ／# ンデ／シ} {し／さかいに}、はよ帰ろ。(1-7-1-2.)

(14) (雲行きを見ていると) 今夜は雨が降りそうや {サカイニ／サカイ／カラ／# (降りソウナ) ンデ／シ}、はよ帰ろ。(1-7-1-3.)

(15) どうも熱があるみたいや {サカイニ／サカイ／カラ／# (アルミタイナ) ンデ／シ}、はよ帰ることにしたわ。(1-7-1-4.)

(16) 雨が降るかもしれへん {サカイニ／サカイ／カラ／*ンデ／シ}、傘持ってきたわ。(1-7-1-5.)

(17) 雨が降るやろ {?サカイニ／?サカイ／カラ／*ンデ／シ}、傘持っていき。(1-7-2-1.)

(18) あの店やったら 11 時には開いてるやろ {*サカイニ／*サカイ／カラ／*ンデ／シ}、行ってみはったらどうです。(インフォーマントB)

インフォーマントAは、推量形式がサカイ・サカイニに前接する用例を調査の初めの段階では即座に不適格と判断していたが、調査を続け調査文の「だろうから」を方言翻訳し

ているうちに判断に迷い始めた。調査文に誘導されたのかもしれない。なお、文脈を指定して自発的にセリフとして発話した回答では、～ヤロサカイニは出てこない。またインフォーマントBはサカイニ・サカイを頻度的にはほとんど使わないが、～ヤロサカイを完全に非文と判断している。筆者自身、～ヤロサカイ・～ヤロサカイニは日常会話で聞いたことがない。

標準語の「だろう」には不自然ながら「?行くだろう人」のような例が許容されるのに対し、京都市方言の推量形式ヤロは連体修飾節内のおさまりが非常に悪く、「*行くヤロ人」のような用例は不適格である。こうしてみると、「行くヤロカラ」「行くヤロシ」が適格で「行くヤロサカイニ／行くヤロサカイ」が不適格であることは、サカイニ・サカイに名詞性が残っていることを意味すると考えられる。

4.4 述語用法

京都市方言でも、原因・理由節が断定辞ヤを伴って、「XはYからだ」のように述語用法をもつ。ンデには述語用法はない。

(19) A 「しんどー。」

B 「あんなぎょーさん飲む {サカイニ／サカイ／カラ／*ンデ／シ} やで。」

(1-6-1.)

(20) A 「最近、太郎、機嫌悪いんや（悪いにや）。」

B 「あんたが次郎ばっかしほめる {*サカイニ／サカイ／カラ／*ンデ／シ} とちがうか？」 (1-6-3.)

(21) A 「最近、太郎、機嫌悪いんや（悪いにや）。」

B 「私が次郎ばっかしほめる {サカイニ／サカイ／カラ／*ンデ／シ} かなあ。」

(1-6-4.)

なお、ここで示した用例をみると、サカイニやサカイ、カラが主節の述語として用いられる際にはモダリティ形式との共起制限が生じてくるようだ。まず、サカイニと～トチガウカ（「～じゃないか」相当）は共起できないという。また、京都市方言では、同等や目下に対する会話であれば、質問の表現としてカが男女を問わず使用されているが、自問の表現としては（21）のようにサカイカナアが適格であっても、質問のカとサカイが共起する場合は（22）のようにサカイカが不適格と判断される（インフォーマントB）。

(22) A 「おなかがすっきりした」

B 「ヨーグルト食べた {サカイニ／*サカイ／カラ／*ンデ／シ} か？」

述語用法の場合の原因・理由形式とモダリティ形式との共起関係については、より詳しく調べる必要がある。

4.5 文末用法

サカイニ、サカイ、カラ、ンデ、シは、倒置あるいは主節の省略などによって文末で利用できる（ただし、ンデは丁寧体でなければならない）。

(23) ここでちょっと待っててな。すぐ帰ってくる {サカイニ／サカイ／カラ／#ンデ／シ}。(倒置、1-8-1-1.)

(24) あとで、もう一回電話する {サカイニ／サカイ／カラ／#ンデ／シ}。(主節省略、1-8-2-1.)

4.6 主節の文タイプによる制限

京都市方言のサカイニ、サカイ、カラ、シには主節の文のタイプによる使い分けはない（頻度差は今回の調査では不明）。

(25) 体調が悪い {サカイニ／サカイ／カラ／#ンデ／シ}、仕事休ませても一た。(休ませてもらった)(叙述、1-2-1.)

(26) 体調が悪い {サカイニ／サカイ／カラ／#ンデ／シ}、今日は仕事休も。(意志、1-2-2.)

(27) 夜道暗い {サカイニ／サカイ／カラ／#ンデ／シ}、一緒に帰ろか。(勧誘、1-2-3.)

(28) 赤ん坊が寝てる {サカイニ／サカイ／カラ／#ンデ／シ}、静かにしてや。(命令、1-2-4.)

(29) 赤ん坊が寝てる {サカイニ／サカイ／カラ／#ンデ／シ}、静かにしてくれへんか。(依頼、1-2-5.)

上記の例では主節が叙述の場合も含め、ンデがすべて不適切(＃)となっているが、ンデは丁寧体でしか用いられないため、ンデとその他の形式との使い分けはスタイル差であってモダリティ制限ではないようである。

(29') 赤ん坊が寝てます {サカイニ／サカイ／カラ／ンデ／シ}、静かにしてくれませんか。(依頼、1-2-5.)

4.7 原因・理由の接続助詞の形式的特徴のまとめ

以上述べた、原因・理由の接続助詞の形式的な特徴を表2にまとめる。

【表2 原因・理由の接続助詞の形式的特徴】

	サカイニ	サカイ	カラ	ンデ	シ
前接要素の音声的共起制限	—	—	—	あり	—
活用語の活用形	終止形	終止形	終止形	連体形	終止形
推量ヤロへの接続	×/?	×/?	○	×	○
述語用法の有無	○	○	○	×	○
文末用法の有無	○	○	○	○	○
主節の文タイプの制限	—	—	—	—	—

4.8 京都市方言の接続助詞シの形式的特徴

ここで、京都市方言のシがもつ形式的特徴について、補足しておきたい。

標準語の接続助詞シが並列だけでなく理由も表すことは従来指摘されており（寺村 1984、堀池 1999）、日本語教育でもシの意味として「理由」も挙げられ、「「ので」や「から」よりもゆるやかな因果関係で、他にも理由があるという含みがある」（グループ・ジャマシイ 1998:135）と説明されている。京都市方言のシも同様に、並列の表現として用いられるだけでなく理由を表すものとして用いられているともいえる。しかし、京都市方言のシは標準語のシとふるまいが異なっている。

まず、京都市方言の並列のシでは、複数ある理由をハによって対比的に表して並べることができない。またこれをデによってくくることもできない。

(30) *映画は見たいシ、時間はないシ。(IV-1-2-1.)

(31) * [子どもは生まれるシ、金はないシ] で、大変や。(IV-1-3-1.)

また原因・理由の用法で用いられるシは、ほぼサカイニやカラなどと置き換え可能で、4.4で述べたように述語用法で用いて断定辞が後接しても適格である。

(32) 頭が痛いんは、昨日お酒を飲み過ぎたシや。(IV-3-1-1.)

ただし、原因・理由のシは主節が過去であれば理由節も過去で一致してしなければ用いにくいようである。カラやノデや並列のシでは動詞述語をとる場合にしか生じない時制の制約（「全部残さず食べ {*る／た} から、腹痛になった。」「りんごも食べ {*る／た} し、柿も食べ {*る／た} し、腹痛になった。」など）が、京都市方言の原因・理由としてのシでは動詞述語だけでなく状態性述語の場合にも生じている。インフォーマントBによると、「坂道がしんどいシ、夏はあんまり大学行かんかったわ。」のように、前件が現在も続いている状態（恒常的性質）の場合ならば前件が非過去形でも自然だが、事態の原因である前件が状態性述語であっても、現在は続いていない状態をさしている場合は過去形でなければシが使用できないという。

(33) 教室が暑い {*シ・サカイニ・サカイ・カラ} 勉強に集中できなかった。

(33') 教室が暑かった {シ・サカイニ・サカイ・カラ} 勉強に集中できなかった。

(34) 天気がええ {*シ・?サカイニ・サカイ・カラ}、海岸を散歩した。

(34') 天気がよかった {シ・サカイニ・サカイ・カラ}、海岸を散歩した。

5. 意味・機能的な特徴

基本的に、京都市方言の原因・理由表現の各形式が持つ意味・機能は、標準語のカラと同じである。以下、丁寧体でない例文の場合、スタイル制限のあるンデは省く。

(35) 毎日雨が降る {サカイニ／サカイ／カラ／シ}、洗濯物が乾かへん。(事態の原因、1-1-1.)

(36) 体調が悪い {サカイニ／サカイ／カラ／シ}、仕事休ませても一た。(休ませて

もらった) (行為の理由、1-2-1.)

(37) 星が出てる {サカイニ／サカイ／カラ／シ}、明日もええ天気になる {やろ／え}。

(判断の根拠、1-3-1 a.)

(38) 危ない {サカイニ／サカイ／カラ／シ}、この川で遊んだらあかん! (発言・態度の根拠、1-4-1.)

(39) 一回でええ {サカイニ／サカイ／カラ／シ}、ピラミッドに登ってみたいわー。

(理由を表さない用法、1-5-2.)

そこで、本節ではサカイニ・サカイ (5.1)、カラ (5.2)、シ (5.3) について、形式ごとに意味・機能的特徴を記述する。さらに、いわゆる説明のモダリティに続く「のだから」相当形式については5.4で記述する。

5.1 サカイニ・サカイ

5.1.1 原因・結果のつながりの強調

調査で例文を方言翻訳する場合はサカイニ、サカイ、シのどれも適格だが、インフォーマントはA、Bともにシのほうを自然だと感じているという。サカイニやサカイは、前件と後件の論理のつながりを示すことに重点が置かれている場合に、その原因・結果のつながりを強調して使われる傾向があり、用意した例文だけではその論理的つながりを強く聞き手に示す必要性を感じ取れないため、シのほうが自然だと感じるようだ。インフォーマントAは、下の(40)だとシをもっともよく使い、(41)のように主節末をノダ文にすると、サカイニもよく使うと内省している。

(40) 天気がええ {サカイニ／サカイ／カラ／シ}、散歩に行った。(2-1-2.)

(41) 天気がええ {サカイニ／サカイ／カラ／シ}、散歩に行ったんや。(2-1-2.)

インフォーマントBは(42)のように、後件が事実の叙述で、かつ前件の理由が必然的に後件の事態を引き起こすような場合、つまり前件が後件の原因・理由だということを詳しく説明しなくても、聞き手が何の問題もなく前件と後件のつながりを受け入れられるような場合には、サカイニが不適格だと回答している。

(42) あのレストランは高くてまずい {*サカイニ／サカイ／カラ／ンデ／シ}、あまり人気がありません。

このことから、サカイニは話し手と聞き手の間で前件と後件のつながりの認識が違っている場合や、聞き手がそのつながりについてまだ認識をもっていない場合に、話し手が自分の認識を聞き手に押し付ける機能を持っていると考えられる。

このことは音調面からも観察できる。原因・結果の説明に熱がこもると、サカイニには独特のイントネーションが現れる(接続詞のソヤサカイニなども同様である)。サカイニのアクセントは普通「高低低低」だが、説明に力が入ると「高低高低」と音調が変わり、「イ」がかなり強く高く発音される。「～するからこそ」の「こ」を

強く高く発音するのと似ている。サカイニはこうしたイントネーションによって「高低高低」となった場合は、特に聞き手に前件の内容を強調して伝える。そして、後件の事態を引き起こした原因・理由がほかでもないその前件の内容であると話し手が聞き手に押し付けるのである。

5.1.2 サカイニと終助詞ナの共起関係

サカイニはサカイやカラ、シと同様に主節末に生起するが、他形式に比べて終助詞ナが後接しにくい。

(43) ここでちょっと待っててな。すぐ帰ってくる {*サカイニ／サカイ／カラ／シ} な。(1-8-1-1.)

(44) ちょっと出かけてくるし、おやつ、プリンが冷蔵庫に入ってる {*サカイニ／サカイ／カラ／シ} な。(1-8-2-2.)

(45) あんたのこと絶対忘れへん {?サカイニ／サカイ／カラ／シ} な。(1-8-2-3.)
終助詞ナがなければ、サカイニの使用は自然である。

(43') ここでちょっと待っててな。すぐ帰ってくる {サカイニ／サカイ／カラ／シ} 。

サカイニの語末のニの母音が、終助詞のナと連続することによって無声化して聞こえにくくなっているようにも考えられるのだが、間投助詞ナ・ナアが従属節につくときは「サカイニナア」もよく使われ、さらに罵りの表現の場合だけは文末で「サカイニナ」が非常によく使われるので、音声的環境では説明できない。

(46) [兄・姉にいじめられた弟・妹が兄・姉に対して] お父さんにゆう {サカイニ／サカイ／カラ／シ} な！(サカイニナの音調は「高低低低高」)(1-8-2-4.)

終助詞ナは、聞き手に同意を求めるものである。これに対してサカイニは5.1.1で見たように、話し手が聞き手に前件と後件のつながりについての話し手の認識を一方的に押し付けるものである。このため、けんかごしでない、聞き手に対する配慮のある場面では、話し手が認識している前件と後件とのつながりが聞き手にも受け入れやすいものとの想定のもと、同意を求める終助詞ナを用いると考えられる。後件が示されていない終助詞的用法であっても、(44)では「おやつとしてプリンが冷蔵庫に入っている」という前件から「食べて」といった後件が、また(45)では「あなたのことを絶対に忘れない」という前件から「あなたも忘れないで」などのような後件が、聞き手にも即座に受け入れられるつながりのものとして想定されているのだろう。これに対して、けんかごしの場面では、明らかに話し手と聞き手の認識に食い違いがある。(46)で省略されている後件は「覚悟しろ」のようなものだろうが、もちろん聞き手はその前件と後件のつながりに納得できないだろう。そのため、サカイニによって話し手は聞き手の認識にかまうことなく一方的に認識をおしつけ、その押し付けた内容について、形だけ同意を求めるナを付けていると思われる。

5.2 カラの意味・機能的な特徴

京都市方言のカラは、標準語のカラとの意味・機能的な違いが見出せなかった。むしろ、他の形式群がそれぞれ持っている特徴によって使い分けられるのに対し、カラはその意味・機能を特化せずに、オールマイティのものとして存在しているように思われる。

5.3 原因・理由のシの意味・機能

5.3.1 並列のシと原因・理由のシの異同

京都市方言で、並列の接続助詞シが理由の表現として使われていることはよく知られている。談話資料にも並列のシとともに、原因・理由と解釈できるシがみえる。

- (47) f: アー ソードスカ ホッタ チョット マタネ エ ユーカタゴシラエモ
シトキマスシ ヨソエ ヨラント セーゼ ハヨ カエッテ キトクレヤッセ
(ああ そうですか。そしたら ちょっと またね、夕飯のしたくも してお
きますから、よそに 寄らずに なるべく 早く 帰って 来てくださいよ。)
(日本放送協会編 1966:258)

寺村(1984:72)にも、こうした京都市方言のシの原因・理由表現の用法について言及がある。寺村は、複数の節を統括する「統括命題」が存在することを指摘し、これによってつなぎあわされていることを示すのが並列のシの基本的な性格と述べた上で、京都市方言のシが理由づけを表すように思われるのは、並列のシの基本的な性格・機能がそれとなく理由をいうのにむいていると考えるべきだと述べる。

しかし、現在では京都市方言のシは並列の用法で標準語のシと異なるふるまいを見せるだけでなく、原因・理由の表現としてかなり発展した段階にあるといえる。

まず、並列の意味での京都市方言のシは、統括命題によってつながれた各節が似たような内容をもつ場合は標準語のシと同様に使われるが、(49)のように各節が食い違った事態を表している場合は、たとえ統括命題が想定できてもシが不適格となる。つまり、並列の意味・機能が狭まっているといえる。

- (48) あの子はピアノも弾くシ、作曲もするシ、歌も歌わはるえ。(IV-1-1-1.)

- (49) *映画は見たいシ、時間はあらへんシ。(IV-1-2-1.)

また標準語の並列のシであれば、話し手の想定する統括命題を導くために後件にはほかでもない話し手がそう考えているのだということを表す内容が出現しやすく、後件に行為要求や詠嘆が出現しやすいという(堀池 1999)。しかし、京都市方言のシは原因・理由の意味があるため、後件に感動や詠嘆の表現がくると前件を原因・理由と捉えるためか、不自然になる。

- (50) 危険やシ、エスカレーターでは遊ばんといてや。(行為要求、IV-2-1-3.)

- (51) ?雪も降ってきたシ、やっときさ冬らしーなってきたなー。(詠嘆、IV-2-3-1.)

並列の意味・機能は狭まっているが原因・理由のそれは広がっているといえ、並列のシ

が持つ根拠の複数列挙という特徴を排除した因果が一对一对応の文脈でも使用できる。

(52) この腕時計、昨日落としてしもたシ、壊れてしもたんや。(IV-2-6-1.)

(53) 定価が一万円やシ、消費税込みで一万五百円や。(IV-2-6-2.)

(54) 三角形の内角の和は 180 度やシ、計算するとここの角度は 30 度になるな。

(IV-2-6-3.)

さらに、京都市方言のシは標準語のカラがもつ慣用表現に置き換えが可能である。

(55) お願いやシ、もっとまじめに勉強して！(IV-2-7-2.)

(56) ええ子やシ、おとなしくしとくんやで。(IV-2-7-3.)

(57) 一回でええシ、宝くじの一等賞に当たりたい！(IV-2-7-4.)

5.3.2 終助詞的なシの用法

主節末にシが生起する場合、標準語のカラの「理由を表さない用法」と同様、後件が示されていないくても後件に聞き手への行為指示や話し手の意志・希望の表明などが述べられることが想定される用法がある。この場合、シはカラ、サカイニ、サカイと完全に置き換えられる。

(58) あとで、もう一度電話するシ。(待っていて)(1-8-2-1.)

注目したいのは、京都市方言のシには標準語のカラの「理由を表さない用法」とは異なつた、話し手の主張を強め聞き手の認識のありかたに働きかける用法があることである。

(59) (プールを使う前に事前に注意する) プールで走ったらあかん {シ／*カラ／*サカイ／*サカイニ}。(IV-4-1.)

(59) の場合、聞き手がその情報に同意しているか確かめる文脈なので、終助詞ナがつくとカラやサカイも適格になるが、終助詞ナがない場合はシしか使えない。

(59') (プールを使う前に事前に注意する) プールで走ったらあかん {シ／カラ／サカイ／*サカイニ} な。(IV-4-1.)

次の例は、終助詞ナが共起しない文脈であり、シしか使えない。

(60) (描いて見せた絵を猫だと言われたが、実は猫ではなく熊のつもりである) 猫とちがうシ。(IV-4-2.)

(61) (わかっていることを説明されて) そんなこと、知ってるシ。(IV-4-3.)

インフォーマントAは、(60) (61) を、「知ってるエ」や「知ってるワ」よりもかなりきつい表現だとコメントしている。これらの表現では、話し手と聞き手との間に認識の相違があることがわかっている場合に、話し手が聞き手の認識を変更させるべく、話し手の認識を一方的に主張している。後件の行為指示が省略されているとすれば、(59) では「走るな」、(60) (61) では「そんなことを言うな」などの相手への否定命令（禁止・制止）だろう。筆者の観察では、こうした用法のシはこのような否定命令のようなものが想定できる文脈であることが多いように思う。

5.4 説明のモダリティ「ノヤ」を伴う形式の用法

いわゆる説明のモダリティに続けて「のだから」相当の表現になる場合も、ンデを除き、サカイニ、サカイ、カラ、シに大きな違いはないようだ。

(62) こっちは真剣 {ナンヤサカイニ／ナンヤサカイ／ナンヤカラ／ナンヤシ／*ヤサカイニ／*ヤサカイ／*ヤカラ／*ヤシ}、からかわんといてや。(確かな事実とその当然の結論、2-2-1-3.)

(63) 若い {ンヤサカイニ／ンヤサカイ／ンヤカラ／ンヤシ／*ヤサカイニ／*ヤサカイ／*ヤカラ／*ヤシ} 1回や2回の失敗でくよくよしんとき。(聞き手に関する情報－行動要求・認識要求、2-2-2-1.)

(64) 体に気一つけや。もう若うない {ンヤサカイニ／ンヤサカイ／ンヤカラ／ンヤシ／*ヤサカイニ／*ヤサカイ／*ヤカラ／*ヤシ}。(倒置、2-2-4-1.)

ただし、終助詞的用法だけはンヤサカイニ、ンヤサカイ、ンヤシが用いられず、ンヤカラだけが適格となる。つまり、サカイニ、サカイ、シは標準語の「のだから」よりも用法が狭いといえる。なお準体助詞ンが介在しない場合はサカイニ、サカイ、シも適格である。

(65) 私、絶対あの人と結婚する {*ンヤサカイニナ／*ンヤサカイナ／ンヤカラナ／*ンヤシナ／*サカイニナ／サカイナ／カラナ／シナ}。(決意)(終助詞的用法、2-2-5-1.)

6. 原因・理由の接続詞の特徴

京都市方言で用いられている原因・理由を表す接続詞には、ソヤサカイニ、ソヤサカイ、ソヤカラ、ソヤシがある。指示詞の部分の発音は多様で、はっきりとした「ソ」ではなく、後接する「ヤ」に逆行同化した「セ」に近い発音なのだが、本稿ではまとめて「ソ」と表記する。なお、これらの接続詞のほかに、ホンデ(添加のソレデ相当)も回答された。また「ホ」など口蓋化した発音がよく聞かれるが、「ホヤカラ」「ホヤシ」「ホヤサカイニ」はインフォーマントAにとっては老年層のものであり、A自身は使用しない。

指示詞と前述した接続助詞との組み合わせからなるこれらの接続詞のうち、ソヤサカイニ、ソヤサカイ、ソヤカラ、ソヤシは、接続助詞カラの文に言い換えられて前件・後件が同一の話し手による場合は標準語のカラと違いがないが、ホンデは使えない。

(66) 最近毎日雨が降るやろ。{ソヤサカイニ／ソヤサカイ／ソヤカラ／ソヤシ／*ホンデ} 洗濯もんが乾かへんね。(事態の原因、3-1-1.)

なおこの場合は、ソヤシの指示詞部分がとれた「ヤシ」(多くは語末が伸ばされて「ヤシー」となる)もよく聞かれる。

(67) 洗濯機の調子悪いやんか。ヤシー、手で洗^ててん^{あろ}。(事態の原因、筆者による観察)

しかし、接続助詞カラの文に言い換えられるが前件・後件の間に話者交替があるものは、様相が異なる。標準語のダカラと違う点について、以下詳しく述べる。

6.1 前件・後件の間に話者交替があつて、聞き手に結論を求めるもの

まず、相手の発話中の事態を受け、それを既知の情報と捉えて、そこから導かれる帰結を述べるものである場合は、上述の(66)と同じく、標準語のカラと違いがない。

(68) A:「最近毎日雨が降るなー。」

B:「そーや。{ソヤサカイニ／ソヤサカイ／ソヤカラ／ソヤシ／*ホンデ} 洗濯もんが乾かへんで困ってんねやんか！」(3-2-1-1.)

しかし前件・後件の間に話者交替があつて聞き手に結論を問い返すもの、つまり話し手が後件の情報を欠いている場合にはホンデが使われ、ソヤサカイニは使われない。

(69) A:「大変や。雨降ってきた。」

B: (雨が降るぐらいでどうして大変なのか理解できず、)

「{*ソヤサカイニ／*ソヤサカイ／ソヤカラ／ソヤシ／ホンデ} それがどーしたん？」

(69') B:「{?ソヤサカイニ/?ソヤサカイ／ソヤカラ／ソヤシ／ホンデ} 何なん？」

(69'') B:「{*ソヤサカイニ／*ソヤサカイ／*ソヤカラ／*ソヤシ／ホンデ} ?」

(3-2-2-1.)

前件にあたる事態を述べた聞き手(話者A)が何を後件と捉えているのかが分からないということは、前件と後件のつながりが原因・理由の関係にあるということと直結しない。接続助詞サカイニ・サカイは前件と後件のつながりに力点のある表現であるため、それが接続詞となったソヤサカイニ・ソヤサカイは後件を欠いている場合に使用できなくなる。ホンデが使われるのは、前件と後件の継起的な関係、添加の意味も表せるからであろう。なお、話し手が後件を欠いていて、想定さえできないわけだから、話し手は、聞き手の述べたその前件に対して相応しい後件などないと思うこともありうる。この場合ホンデには、標準語のダカラやソレデがもつ「だから何だというのだ」といった聞き手を非難するようなニュアンスも生じる。

このように、聞き手に結論を求める用法に関しては、京都市方言の原因・理由の接続詞の機能が標準語のダカラの機能よりも狭いといえる。

6.2 接続助詞「から」の文に言い換えられず、「あなたもわかっているはずなのに」という話し手の態度を表すもの

話し手が既に述べたことについて「私はそれについては既に述べているのに」といった話し手の発話態度を表す場合、また、聞き手が既に了解しているはずのことについて「あなたは既にそのことを了解しているはずなのに」、といった話し手の発話態度を表す場合には、ソヤサカイニ、ソヤカラ、ソヤシが用いられ、ホンデは不適格である。

(70) A:「さっき頼んだ仕事、ちゃんとやってな。」

B:「うん、今日中にやるわ。今ちょっと忙しーしできへんにゃわ。」

A : 「明日までにやってな。」

B : 「{ソヤサカイニ／ソヤサカイ／ソヤカラ／ソヤシ／*ホンデ}、今日中にやる^ゆ言うてるやんか。」(発話行為間の因果関係があるもの、3-3-1-1.)

(71) A : 「さっき頼んだ仕事、やってくれた？」

B : 「え？ 何のこと？」

A : 「{φ／ソヤサカイニ／ソヤサカイ／ソヤカラ／ソヤシ／*ホンデ}、さっき頼んどいたやろ。」(発話行為間の因果関係がないもの、3-3-2-1.)

なお、特に (71) の発話行為間の因果関係がないものは、近年獲得された用法らしく、もっとも自然なのは何も接続詞をつけないことだとの回答を得ている。

7. まとめ

京都市方言の原因・理由の接続助詞と接続詞の諸形式について、形式的な面についてはそれぞれの形式の異同を確認していく形で、また意味・機能的な面についてはそれぞれの形式がどのような用法を特徴として持っているのかについて述べた。

形式的な面では、形式名詞出自のサカイニ・サカイが、接続では名詞性がないが推量のヤロに後接しないという点では名詞性を残していることが明らかになった。また、京都市方言のシは並列のシから発達したものだが、標準語の並列のシとは構文的なふるまいが異なっていることがわかった。

意味・機能的な面については、サカイニが前件・後件の因果関係を重視する点、シが原因・理由の意味・機能をカラと置き換え可能なほどに備えていることなど、形式ごとにある程度の意味特徴を捉えることができた。しかし、シの終助詞的な用法や接続詞の用法などの点では、まだ意味記述にまでは至っていないレベルにある。終助詞的な用法や接続詞の記述には、調査票を超えて、適切な文脈を見つけ出して類型化し、丁寧に探っていく必要がある。

きめ細かな記述、そして様々な差異が意味することに深く切り込む作業は手付かずになっているが、他方言の記述と対照させながら今後の課題として取り組んでいきたい。

参考文献

- 岩崎卓(1995)「ノデとカラ」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』くろしお出版
- 前田直子・日高水穂・小西いずみ・船木礼子(2006)「原因・理由表現」大西拓一郎編(2006)『方言文法調査ガイドブック2』科学研究費基盤研究(B)「方言における文法形式の成立と変化の過程に関する研究」(課題番号 14310196)
- 金沢裕之(1998)『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 金田弘(1976)『洞門抄物と国語研究』桜楓社(第9節「接続辞『サカイ』考」)
- 亀井孝(1936)「理由を表はす接続助詞『さかいに』」『方言』6.9

- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所（1989）『方言文法全国地図 第1集』財務省印刷局
- 小西いずみ（2003）「会話における「ダカラ」の機能拡張—文法機能と談話機能の接点—」『社会言語科学』6-1
- 小西いずみ（2000）「東京方言が他地域方言に与える影響—関西若年層によるダカラの受容を例として—」『日本語研究』20
- 小林賢次（1992）「原因・理由を表す接続助詞——分布と史的変遷——」『日本語学』11.6
- 小林千草（1977）小林千草（1977）「近世上方語におけるサカイとその周辺」近代語学会編『近代語研究』5、武蔵野書院
- 小林好日（1944）「東北方言に於ける助詞『さかい』」『国語学論集〈橋本博士還暦記念会〉』岩波書店
- 白川博之（1995）「理由を表さない「カラ」」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版
- 白川博之（2001）「接続助詞「シ」の機能」中右実教授還暦記念論文編集委員会編『意味と形のインターフェイス 下巻』くろしお出版
- 寺村秀夫（1984）「並列的接続とその影の統括命題—モ、シ、シカモの場合—」『日本語学』3-8
- 中井幸比古（2002）『京都府方言辞典』和泉書院
- 永野賢（1952）「「から」と「ので」はどう違うか」（『日本の言語学』第4巻所収）
- 日本放送協会編（1966）『全国方言資料』4、日本放送協会
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子（2001）『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版
- 浜田麻里（1995）「ソシテとソレデとソレカラ—添加の接続詞—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版
- 東和枝（1999）「滋賀県湖南方言における原因・理由の接続助詞について」『阪大社会言語学研究ノート』1、大阪大学文学部日本語学講座社会言語学研究室
- 堀池尚明（1999）「「シ」を用いた原因・理由表現について」『筑波日本語研究』4 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

謝辞

「ソト」の者をなかなか受け付けられない京都でインフォーマント探しに手こずる私に、協力を快諾くださり、またバリエーションが多いために長引く調査に最期までおつきあいくださったインフォーマントの瀬戸隆代様ともうお一方に、御礼申し上げます。調査中も、頭の痛くなるような例文が多い中、朗らかなお人柄に救われました。記して感謝申し上げます。